

保存・利用支援等WGにおける主な御意見

※ 第1回WGにおける新たな国立公文書館の機能・施設、運営等に関わる御意見（発表、資料提出によるものも含む）を取りまとめたもの。

< 1. 機能・施設面に関する御意見 >

（保存施設の在り方）

- 収蔵施設の周りに遮蔽層を設ける、地下でない場合は北側に向けて配置するなどにより、温湿度の影響を受けにくい省エネの建物にしておけば、建設後のランニングコストを低く抑えられる。
- 収蔵庫へのアクセス頻度を踏まえると、展示する時にしか開けないことを前提とした博物館の収蔵庫ではなく、どちらかというところ図書館に近いものを想定した方がよい。
- 収蔵庫の中には、脆弱な資料のタイプに合わせた特別収蔵庫を設けることが必要。

（施設全体の整備方針）

- 収蔵資料の最適な保存環境維持に加え、地球環境への配慮、ランニングコストの低減、利用者や職員の快適さや安全性の確保などの観点についても、施設の建設に当たってのポリシーとして考える必要がある。

（施設内の配置・環境管理）

- 資料の流れ（受入れから利用まで）と利用者の流れ（利用者入口から閲覧室・展示室まで）に配慮した機能と空間の配置にする必要がある。
- 温湿度環境については、外から閲覧室、収蔵庫と向かうに従って変化の少ない環境を維持し、かつ資料の行き来による急激な温湿度変化を避けるとともに、閲覧室と収蔵庫との差が小さくなるような温湿度管理を行うとよい。

（備えるべき機能・施設）

- 記録媒体の研究、保存・修復のための素材の研究等、資料の保存・修復に関する研究開発機能も、国立公文書館において備えるべきである。

< 2. 運営面に関する御意見 >

（資料保存全体のマネジメントの必要性）

- 資料保存についての方針と計画を立案する能力を備えたマネジメントの専門職を置くことが必要。
- 資料保存の全体を統括しマネジメントできるような部門の設立が望まれる。
- 国立公文書館としての資料保存全体の指針の策定が急務である。

- 原本、マイクロフィルム、デジタルデータの保存の重点の置き方は、経営判断に属する問題である。原本の保存には最大限のコストを投じるべき。デジタルデータはコピーを複数箇所でも保存し、既存のマイクロフィルムもできるだけ保存することが望ましいが、劣化した閲覧用のマイクロフィルムについては、保存にかかるコスト等に鑑み、破棄するなどの決断も視野に入れるべき。
- 原本にはオリジナルとしての普遍的な価値があり、その保存は大変重要である。他方、電子データは利用拡大の観点から重要であり、マイクロフィルムは目に見える、燃えないなどの特性をもっており、原本、マイクロフィルム、デジタルデータの残し方は重要な論点。

(修復及びデジタル化の積極的、計画的な推進)

- 劣化状況調査等の基礎調査による適切な優先度の判断に基づき、積極的、計画的に修復及びデジタル化を進めていくことが必要。
- 本来は資料の利用頻度や利用ニーズを調査してからデジタル化を進めることが望ましいが、研究動向や利用傾向はなかなか掴みにくいため、むしろデジタル化を進めている資料について自ら積極的に PR し、利用を促進していく、ということも必要。
- 現物利用・閲覧、展示、撮影時対応といった利用目的に応じて、修復の強化の度合いが変わり得るということを明確にし、適切な修復方法を選択することが必要。
- デジタルデータについては、アナログ資料とは異なる点におけるランニングコストの増大が見込まれるため、作成、保存、公開の方針と仕組みについて、保存計画、技術、費用の各視点から適正ラインを指針として示すべき。

(その他)

- 環境保護と人命の尊重の観点から、現在つくば分館で使用している酸化エチレンも含め、殺虫のための薬剤の使用は自粛すべき。
- 世界の気象動向として、洪水の頻度増加や被災地の拡大などの傾向を踏まえ、国の機関として、災害時の何らかの形での支援体制や他機関との連携体制をつくる必要がある。
- 大型冷凍庫、真空凍結乾燥機などの整備については、日常的に必要なでなければ難しいという面があるので、そういった面でも MLA の連携が必要。